国立国語研究所学術情報リポジトリ

コミュニケーションから見た言語の二面性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 窪薗, 晴夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003624

コミュニケーションから見た言語の二面性

理論・対照研究領域　窪薗 晴夫

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

■ 言語とコミュニケーション

- 言語の第一の目的はコミュニケーションである。
- 音声コミュニケーションではプロソディー（アクセント・イントネーション）が重要な役割を果たす。

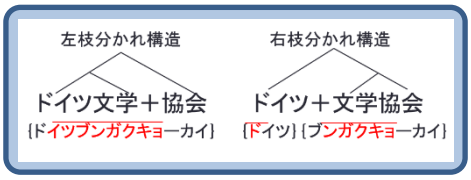
■ プロソディーによる曖昧性の解消

1） 語の曖昧性とアクセント

- アメ：雨、飴
- ハナ：華（人名）、花、鼻
- ハシ：箸、橋、端
- イワテサン：岩手さん、岩手山、岩手産
- オショクジケン：汚職事件、お食事券



2） 複合語の曖昧性とアクセント



類例：日本舞踊協会　/　中国文化大学　/　国民性調査

3） 句構造の曖昧性とアクセント

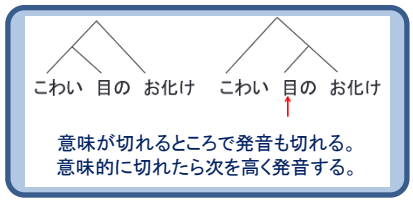
- 「いい加減」
  ① あの人どんな人？
  → いい加減な人　{いいかげん}
  ② 湯加減どうですか？
  → いい加減だ　{いい}{かげん}

- 「朝ご飯にする？」
  ① お腹空いたから、そろそろ{あさご飯}にする？
  ② パンも飽きたから、{あさ}、{ご飯}にする？

4） フォーカスとイントネーション

母親：太郎は**子供**じゃない（＝子供だ）。
父親：太郎は子供じゃ**ない**（＝子供ではない）。
cf. 近畿方言：**アホ**ちゃう（＝アホだ）。
アホ**ちゃう**（＝アホではない）。

5） 統語的な曖昧性とイントネーション







類例：「青い縞模様のシャツ」「太郎と花子のお母さん」
「図書館にある本を運んだ」「あの人に気をつけろと言った」
「あの犬の小屋」「織田信長／信成は死んでいません」



■ プロソディーの多様性

1） アクセントの地域差

※赤字を高く発音

	大阪（多型）	東京（多型）	鹿児島（二型）	小林（一型）
雨	**アメ**	アメ	**アメ**	**アメ**
飴	アメ	**アメ**	アメ	
橋	ハシ	**ハシ**が	ハシ	**ハシ**
箸	**ハシ**	ハシが	**ハシ**	
端	ハシ	**ハシ**が		
岩手さん	イワテサン	イワテサン	**イワテサン**	**イワテサン**
岩手山	イワテサン	イワテサン		
岩手産	イワテサン	イワテサン		
汚職事件	オショクジケン	オショクジケン	オショクジケン	オショクジケン
お食事券			オショクジケン	

2） イントネーションの地域差

- 東京・大阪：疑問文は文末でピッチを上げる
- 名古屋：文末の疑問詞は下げる
  「それ、なに↘？」　「あれ、だれ↘？」
- 鹿児島：疑問文はいつも文末を下げる
  「わかる↘？」　「うん、わかる」
  「くる↘？」　「うん、くる」
  「大丈夫↘？」　「うん、大丈夫」
  「ぞう（象）↘？」　「うん、ぞう」



■ 結論

- 言語はコミュニケーションと多様性の二面性を持つ。
- 「コミュニケーション」のためには、人間の言語は単一というのが理想的。方言もない方が良い。
- その一方で、言語は変化し「多様性」を持つ。その多様性が言語差、方言差、世代差となってコミュニケーションを阻害する。
- プロソディーも同様。プロソディーは音声コミュニケーションに不可欠である一方で、その多様性がしばしばコミュニケーションの障害（誤解）を引き起こす。

謝辞：方言調査協力者の皆さん、科研費（19H00530, 20H05617）、国語研基幹型共同研究「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」

参考文献：窪薗晴夫（2017）『通じない日本語』平凡社新書．窪薗晴夫（2021）『一般言語学から見た日本語のプロソディー』くろしお出版．